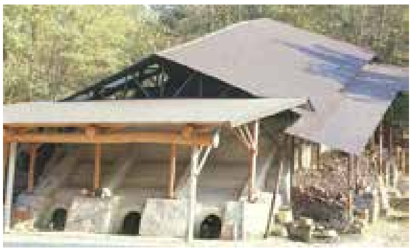


見てみよう、訪ねてみよう、せとの歴史と文化財

せと歴（れき）!

一里塚本業窯

瓶子陶器窯跡

せと　歴史と文化財を知る見学会
「江戸と昭和の登窯を見に行こう」

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団

日時：令和４年２月５日（土）

	①	②	
見学コース：	午前９時 30 分	午後１時 00 分	文化センター北駐車場出発
（予定時間）	９時 40 分	１時 10 分	①一里塚本業窯到着
	10 時 10 分	１時 40 分	一里塚本業窯出発
	10 時 30 分	２時 00 分	②瓶子窯跡到着
	11 時 20 分	２時 50 分	瓶子窯跡出発
	11 時 30 分	３時 00 分	文化センター北駐車場到着・解散

瀬戸市域の主な指定・登録文化財	時代	世紀	やきもの生産の変遷	今回見学する文化財とその関連年表
	古墳	5世紀	須恵器・灰釉陶器	
本地大塚古墳（西本地町2丁目）	古墳	6世紀	須恵器・灰釉陶器	
宮地古墳群（上之山町2丁目）	飛鳥	7世紀	須恵器・灰釉陶器	
	奈良	8世紀	須恵器・灰釉陶器	
	平安	9世紀	須恵器・灰釉陶器	
広久手 30 号窯跡 木造十一面観音菩薩立像（下半田川町）県 木造阿弥陀如来立像（下半田川町）県	平安	10世紀	須恵器・灰釉陶器	
	平安	11世紀	須恵器・灰釉陶器	
	平安	12世紀	山茶碗・古瀬戸	
古瀬戸瓶子（寺本町）	鎌倉	13世紀	山茶碗・古瀬戸	
陶製狛犬（深川町）国 瀬戸窯跡【小長曽窯跡】（東白坂町）国	南北朝	14世紀	山茶碗・古瀬戸	
永享年銘梵鐘 聖徳太子絵伝（塩草町）	室町	15世紀	山茶碗・古瀬戸	
定光寺本堂（定光寺町）国 織田信長制札（窯町） 菱野郷倉『大般若経』［一部鎌倉］	戦国 安土・桃山	16世紀	大窯製品	
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】（凧山町）国 源敬公廟（定光寺町）国	江戸	17世紀	連房製品	17 世紀中・後葉　瓶子陶器窯跡の操業
笠原村・両半田川村国境争論絵図（東松山町） 石造地蔵菩薩立像（片草町）	江戸	18世紀	連房製品	
陶質十六羅漢塑像（寺本町） 六角陶碑（藤四郎町）	江戸	19世紀	連房製品	
旧山繁商店（仲切町・深川町）国登 瀬戸永泉教会礼拝堂建造（杉塚町）国登 陶製梵鐘（深川町）	近代（明治）（大正）（昭和）	20世紀		1950（昭和 25）　奥洞窯の部材を使用して一里塚本業窯建造 1975（昭和 50）　一里塚本業窯操業終了後市文化財指定

一里塚本業窯（市指定建造物）

瀬戸では、江戸時代前期に従来の窖窯・大窯の構造から、斜面に階段状に焼成室を連ねる連房式登窯の構造へと陶器焼成窯を変化させていきます。連房式登窯を改良して江戸時代後期には、大型の磁器製品を焼成するための「丸窯」が、また、江戸時代の終わりごろには「古窯」と呼ばれる小型の磁器製品を焼成するための窯体が登場し、このころから従来より行われていた陶器生産を行った連房式登窯を「本業窯」と呼ぶようになりました。

現在、瀬戸市内で昭和期以降天井部まで残る連房式登窯は、洞本業窯（洞町）と一里塚本業窯（一里塚町）、古窯（瀬戸染付工芸館）の３基が知られていますが、これらすべて市指定文化財 (建造物) となっています。

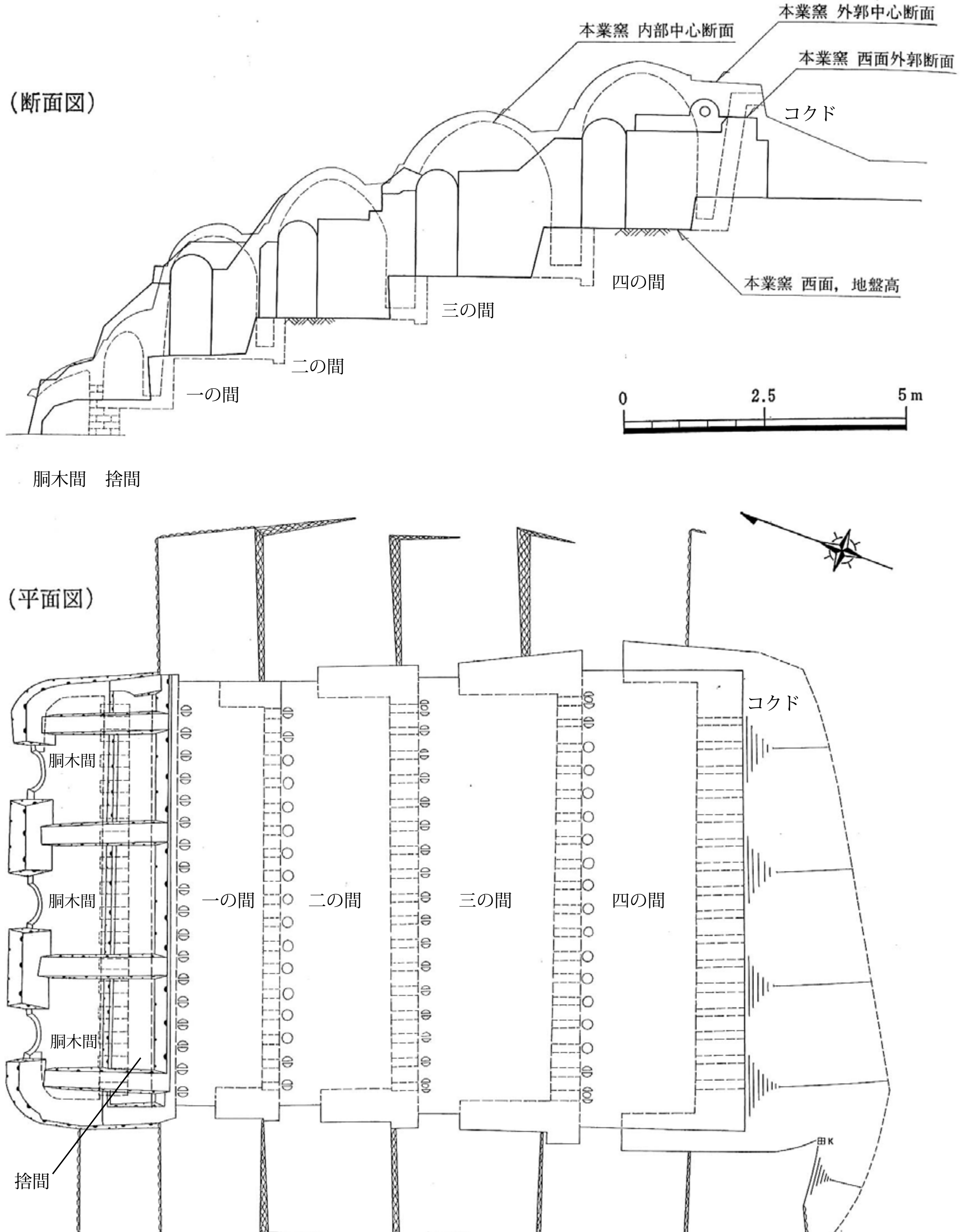
一里塚本業窯はもともと東洞町に在った 13 連房の奥洞窯（水野平右衛門を家祖とする半次郎家、逸太郎家、與左衛門家の兄弟３家による共同経営窯）の窯材を使用して水野半次郎家の兄弟が築いた２基のうちの１基です。（１基は洞本業窯）

昭和 25(1950) 年に北西向き斜面に築かれ、全長が 15.1 mで、胴木間・捨間・一の間から四の間までの焼成室、煙室（コクド）など奥洞窯の構造がよく残されています。幅は、一の間で 1.44 m、四の間で 2.08 mとなっています。火鉢・水甕・擂鉢などを年３回ほど焼成していました。擂鉢だけなら約１万個を焼成することができたといいます。昭和 45、46 年ごろに最終焼成が行われ、昭和 50(1975) 年に市文化財 (建造物) 指定を受けました。付属するツク・タナ板などの窯道具類も指定に含まれています。

本業窯の右手には製土・成形・施釉等を行う工房がみられます。工房はモロと呼ばれ、和小屋構造の小屋組みです。明治 33(1900) 年建造の市指定文化財の王子窯モロは２階建てで、１階が作業場、２階が施釉・焼成前素地の保管庫として使われていますが、一里塚本業窯のモロは天井が高い平屋建で、比較的新しい時期のモロとみられます。一基のモーターがあり、プーリーやベルトを介して縦型（バケツ形）土練機やロクロの動力を賄っている。また、大型の真空土練機もみられるなど、近代の窯業民俗を伝える貴重な機械・道具が残存しています。

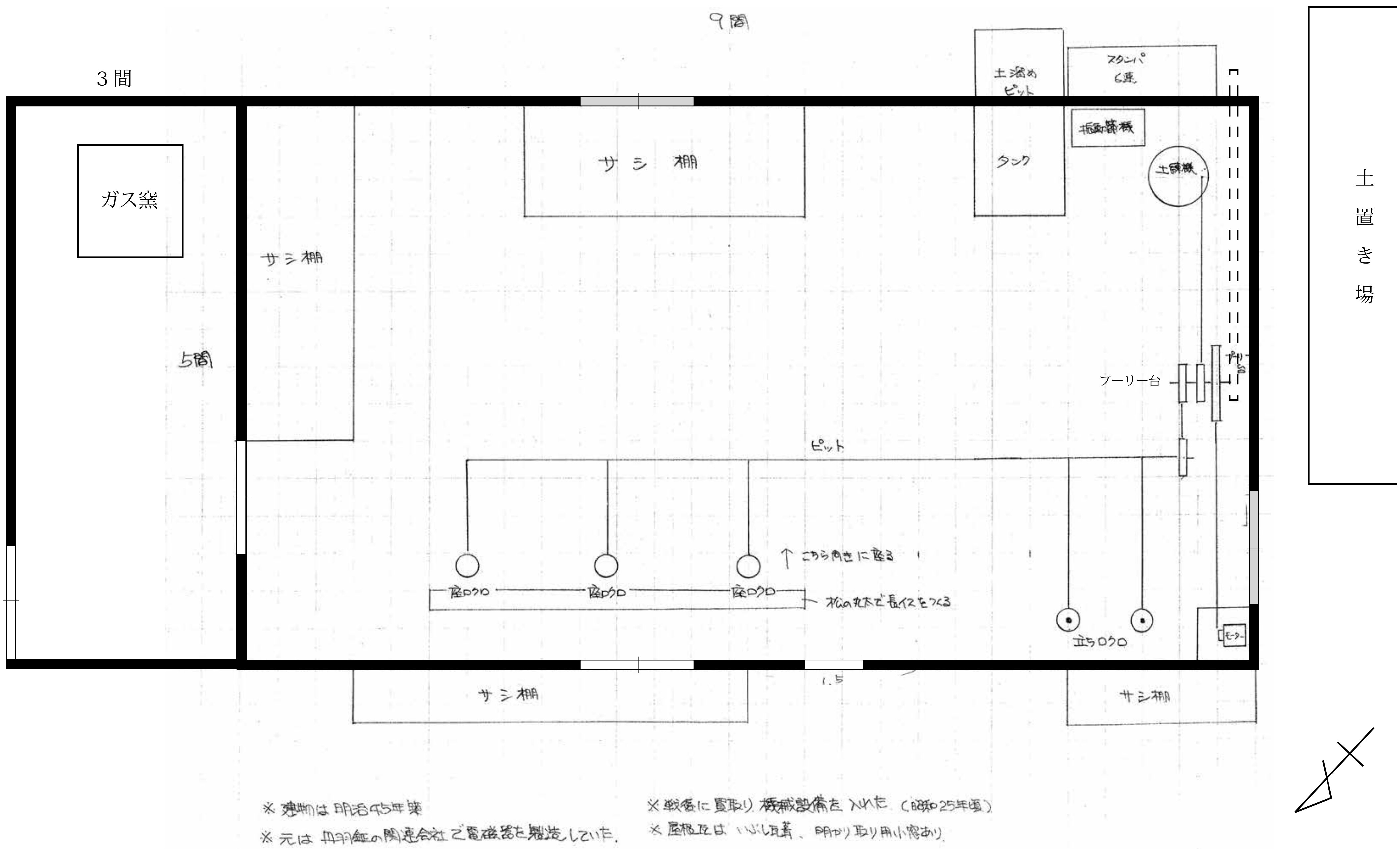
モロの奥の上段には、かつて使用された石炭窯（右手奥）、軽油窯（左手奥）がみられます。

一里塚本業窯 建造物配置図 (1：1,000)



一里塚本業窯実測図（1：100）

（山川一年 1991『瀬戸市史　陶磁史編 5』瀬戸市　より）



一里塚本業窯モロ平面見取図　(2004 年瀬戸市窯業民俗調査の図に加筆)

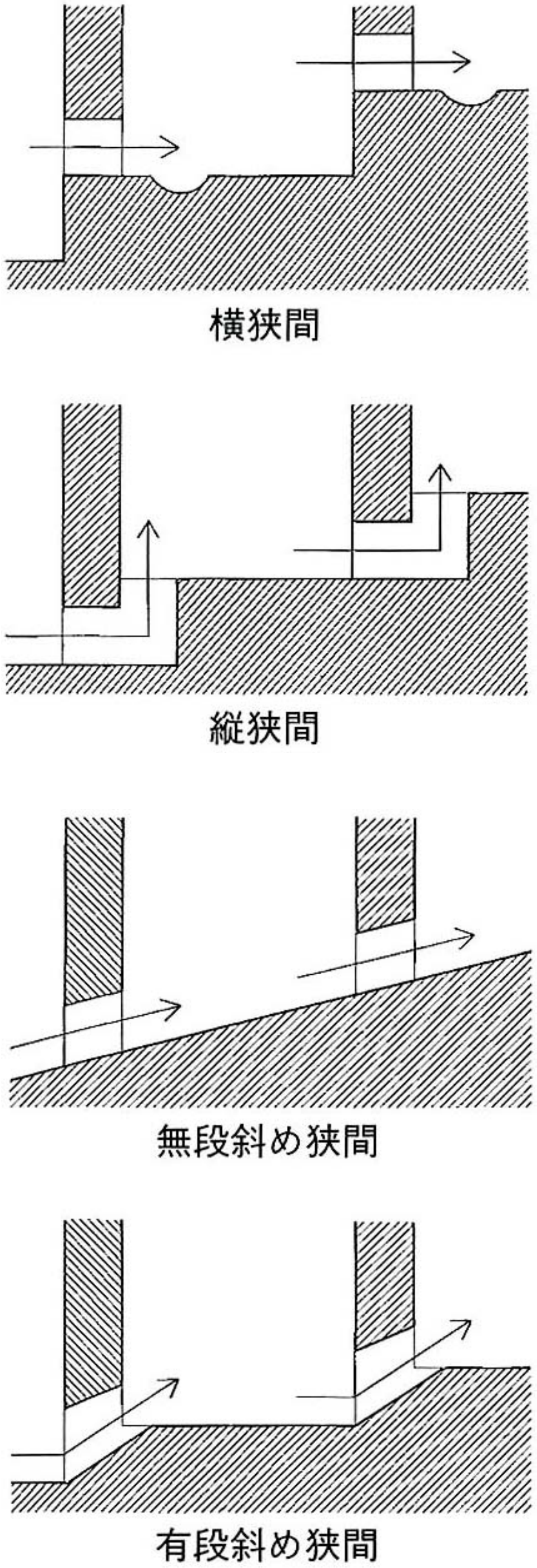
連房式登窯の狭間構造

狭間（さま）は下の焼成室の燃焼ガスを上の焼成室へ送る通炎孔（つうえんこう）で、幅約 20㎝前後の孔が横並びに開けられ、構造により３種類に分けられます。

① **横狭間（よこさま）**
焼成室前面の段上に壁を立ててその最下部に横方向の通炎孔を設けます。奥壁から見ると通炎孔は床面より上にあります。

② **縦狭間（たてさま）**
段の前に壁を立てて、横狭間と同様に最下部に通炎孔を設けますが、壁の裏側で炎の向きが縦方向に変わるもので、奥壁でみると通炎孔は床面と接しています。

③ **斜め狭間（ななめさま）**
通炎孔が斜めになったもので、無段と有段に分けられます。無段斜め狭間は床面全面が一律に斜めになっており、焼成室の境界の段を持ちません。有段斜め狭間は焼成室の境界に段を設けています。



狭間構造断面図

((公財)瀬戸市文化振興財団 2003『江戸時代の瀬戸窯』より)

国指定重要文化財 史跡「瀬戸窯跡」

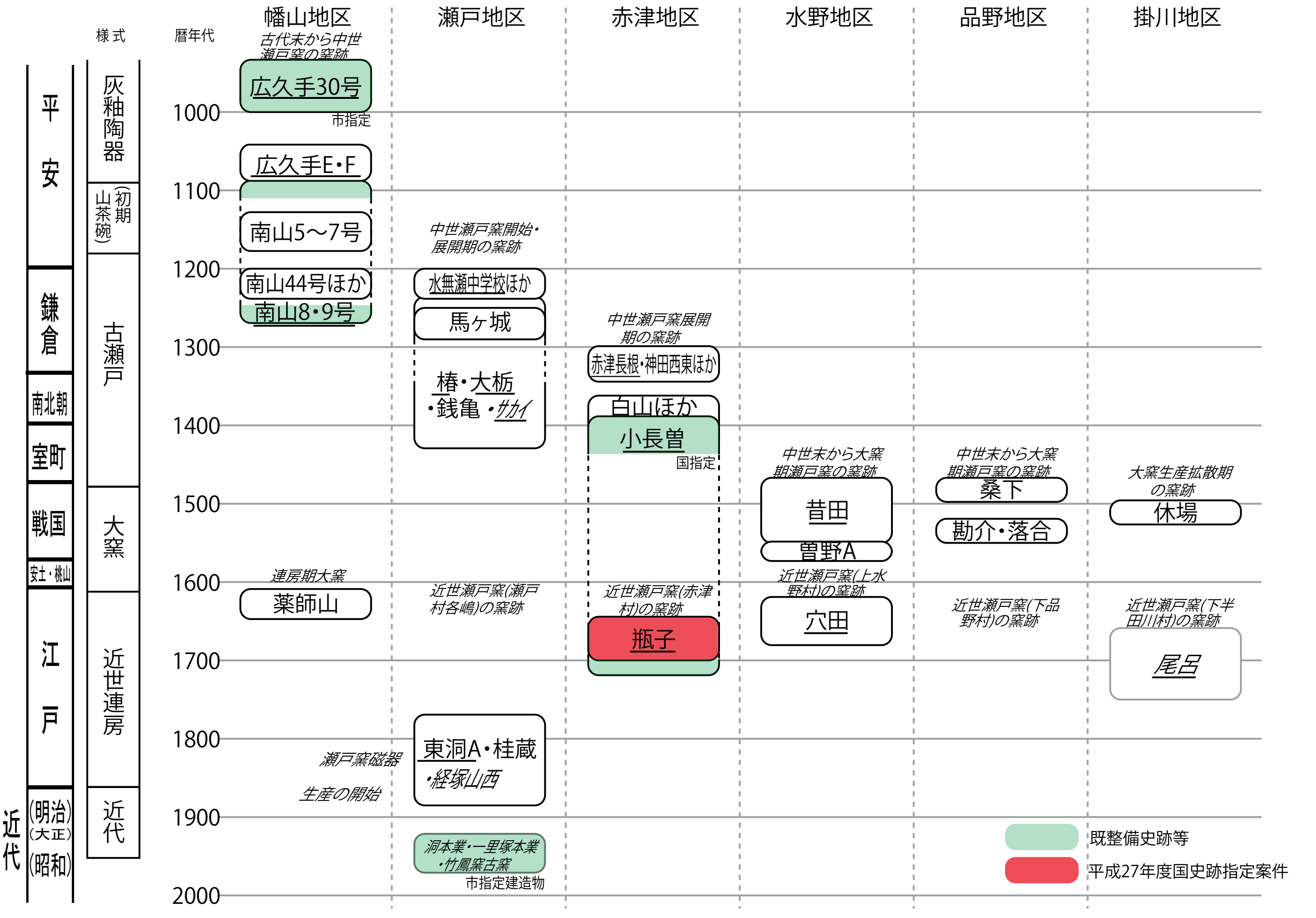
1,000 年以上のやきものの歴史をもつ瀬戸市域には、平安時代から今日に至るまでの窯跡が 885 基確認されています。それらの中でも、窯跡の残存状況が良好なものや歴史的・文化財的価値の高いものを、将来にわたって保存活用していくべき遺産として抽出していく必要があります。

しかし、瀬戸市域では、これまで国指定史跡は昭和 46 年指定の東白坂町「小長曽（こながそ）陶器窯跡」1 件のみでした。そこで、平成 11 年度から 18 年度まで窯跡を中心とした市内重要遺跡の確認調査を行い、県内窯業遺跡保存検討会等を経て 101 遺跡（30 窯体群）を抽出しています。

平成 27 年 6 月 19 日の文化審議会答申を経て、同年 10 月 7 日に「瀬戸窯跡」として瀬戸窯の窯跡をまとめて捉え、その構成史跡である「小長曽陶器窯跡」に、新たに「瓶子陶器窯跡」を加える国史跡指定となりました。

このような多様な国史跡「瀬戸窯跡」の追加指定候補の抽出を行うべく、現在も灰釉陶器窯、近世窯跡を中心に確認調査を継続しています。

瀬戸市内重要窯跡等 時期・地区別一覧



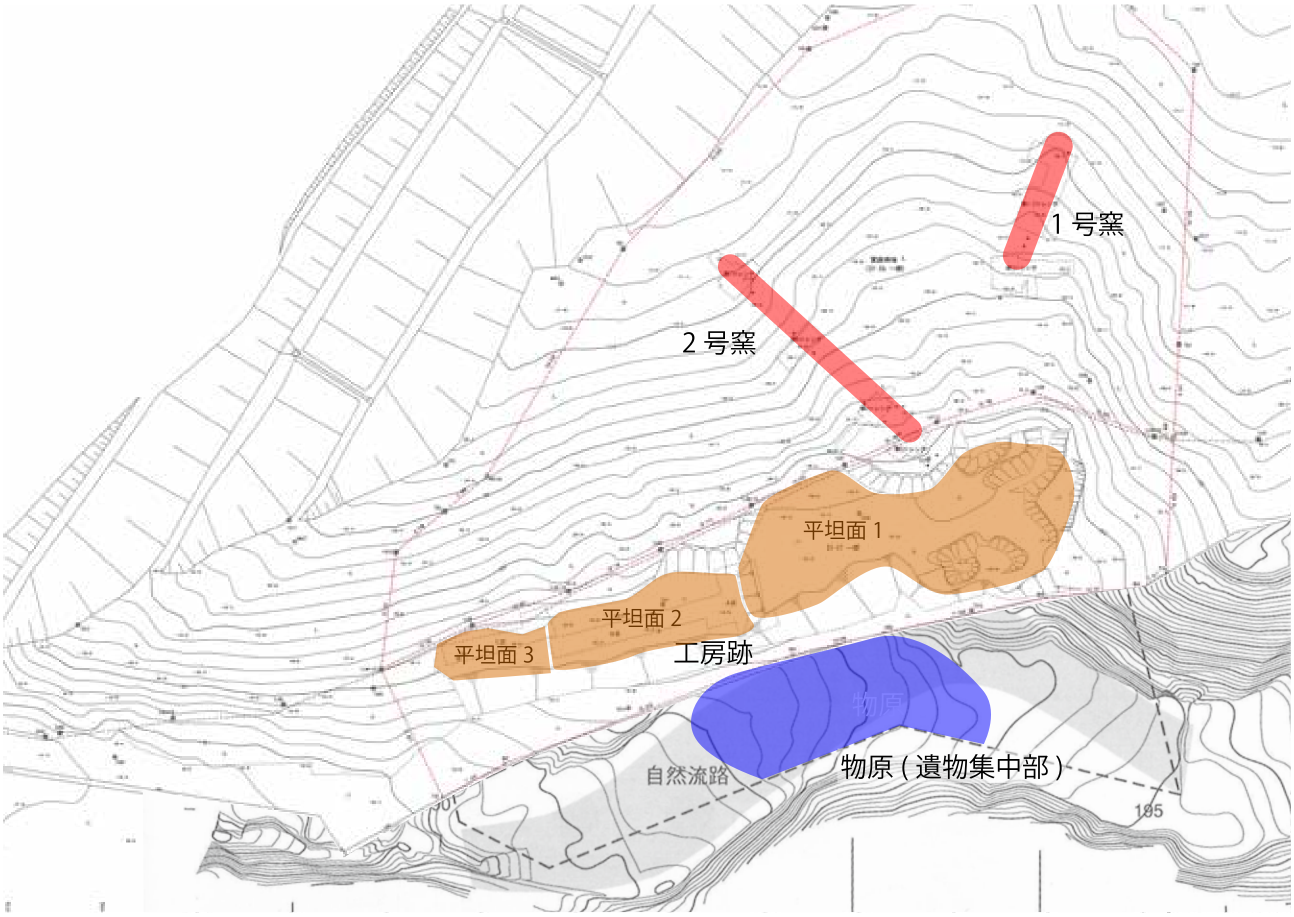
※市内重要窯跡は、(財)瀬戸市文化振興財団2008『瀬戸窯 瀬戸市内重要遺跡試掘調査報告』より引用し記載（斜字は対象外） 遺跡名下線は既発掘調査窯跡を示す。

瓶子陶器窯跡（国指定史跡）

瓶子陶器窯跡は、赤津地区 (旧赤津村) のほぼ中央部に位置します。赤津盆地を形成する赤津川の左岸で、その支流の小谷を南側に臨む丘陵斜面の標高 195 ～ 210 ｍの位置に、17 世紀中頃から末にかけて操業された、2 基の連房式登窯と工房跡が所在します。

赤津地区は、その山間部で鎌倉時代から戦国時代にかけて「古瀬戸」と呼ばれる施釉陶器や山茶碗を焼いた窖窯・大窯が数多くみられます。しかし、16 世紀後半に陶工のほとんどが美濃窯に移動し、赤津のみならず瀬戸窯全体の生産活動が確認できない期間があります。その後、慶長十五年 (1610) に名古屋城の築城が始まると、尾張藩により陶工が赤津をはじめ瀬戸・下品野に呼び戻され、再び窯業生産を活発に行うようになります。中でも、旧赤津村では藩の御用も務めた「御窯屋」(加藤利右衛門・仁兵衛・太兵衛) も所在し、尾張藩との結びつきが強い生産地である点も特徴的です。赤津地区の江戸時代の窯跡は赤津盆地を北から西側に囲む丘陵斜面に立地し、現在の集落・陶磁器工房の中心部とも重なる例がほとんどですが、瓶子陶器窯跡はその盆地対岸に位置し、やや特異な立地となっています。

これまで、瓶子陶器窯跡の主な発掘調査は 2 回行われています。①平成 10・11 年度に窯体と工房跡の位置を確認するための確認調査 ((財) 瀬戸市埋蔵文化財センターによる)、②平成 15 年度に遺跡南側の谷部分を対象に東海環状自動車道建設の事前調査として行われた本発掘調査 ((財) 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターによる) です (名称は当時)。



瓶子陶器窯跡遺構配置イメージ図（1：800）

※（財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター 2005 より転載・加筆

瓶子窯跡で行われた発掘調査では、窯体２基と工房跡、そして物原が確認されました。

２基確認された窯体のうち、東側の南向き斜面にが１号窯が確認されました。残存長は **15.4 m**です。下からみて前半部が「大窯」構造、後半部が「連房式登窯」構造をなしており､「大窯・連房連結窯」(仮称) と呼ばれている特殊な構造です。

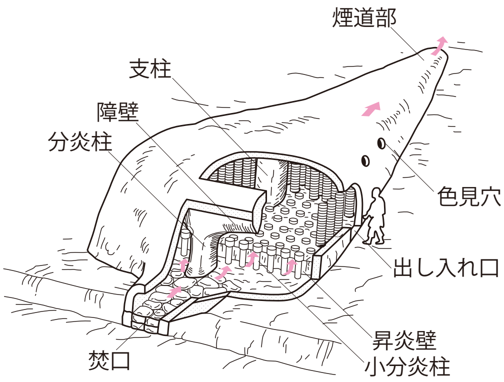
窯体前半部に燃焼室と大きな焼成室が続く大窯部分は、燃焼室が長さ１m・幅 0.6 mで、奥行 2.8 m以上・推定幅 3.92 mの焼成室が続きます。

後半部は、６房の連房が確認され、各房はわずかに段をもつ有段式斜狭間構造で、幅は 2.4 ～ 2.9 m・各房の奥行は 0.9 mです。

出土遺物は、17 世紀末の最終焼成品が確認されています。

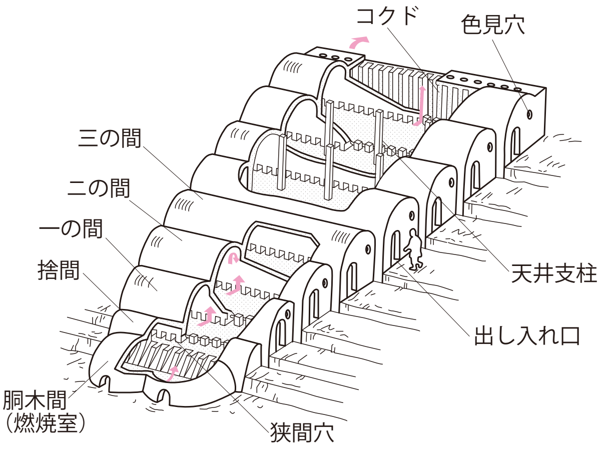
２号窯は、１号窯から小支谷を挟んだ西側の南東向き斜面に構築されていました。有段斜狭間構造の連房式登窯で、残存長は **28.3 m**です。４か所の確認調査から、14 ～ 15 房の焼成室であったと考えられます (窯体の模式図はP12「陶窯」参照)。

最も下方の燃焼室は、平面形が不整形な逆台形で、奥に直径 0.7 mの分炎柱とその左右に高さ 0.7 ～ 0.8 mの昇炎壁があります。燃焼室に続く焼成室第１室の幅は 2.5 m、他の焼成室はいずれも 2.6 mで、第４室の前後の狭間柱間の奥行は 1.5 mです。出土遺物は 17 世紀前葉からのものがみられますが、最終焼成時の床面出土遺物は 17 世紀後葉のものでした。



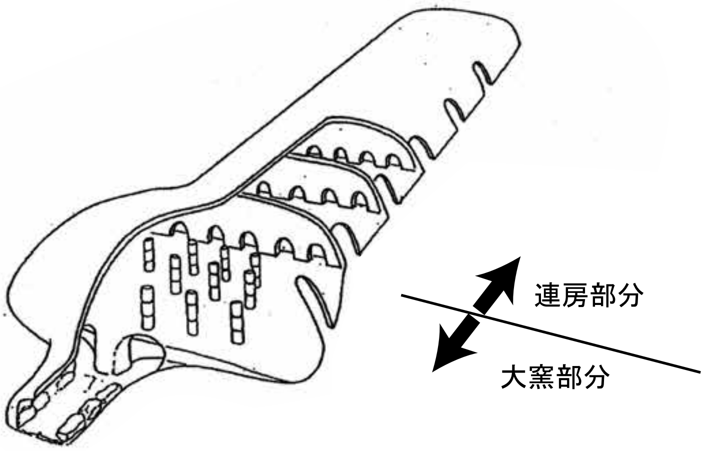
大窯

＋



連房式登窯

＝



瓶子１号窯跡模式図

瓶子１号窯　窯体図（1：100）

大窯部分（前半部）の全景

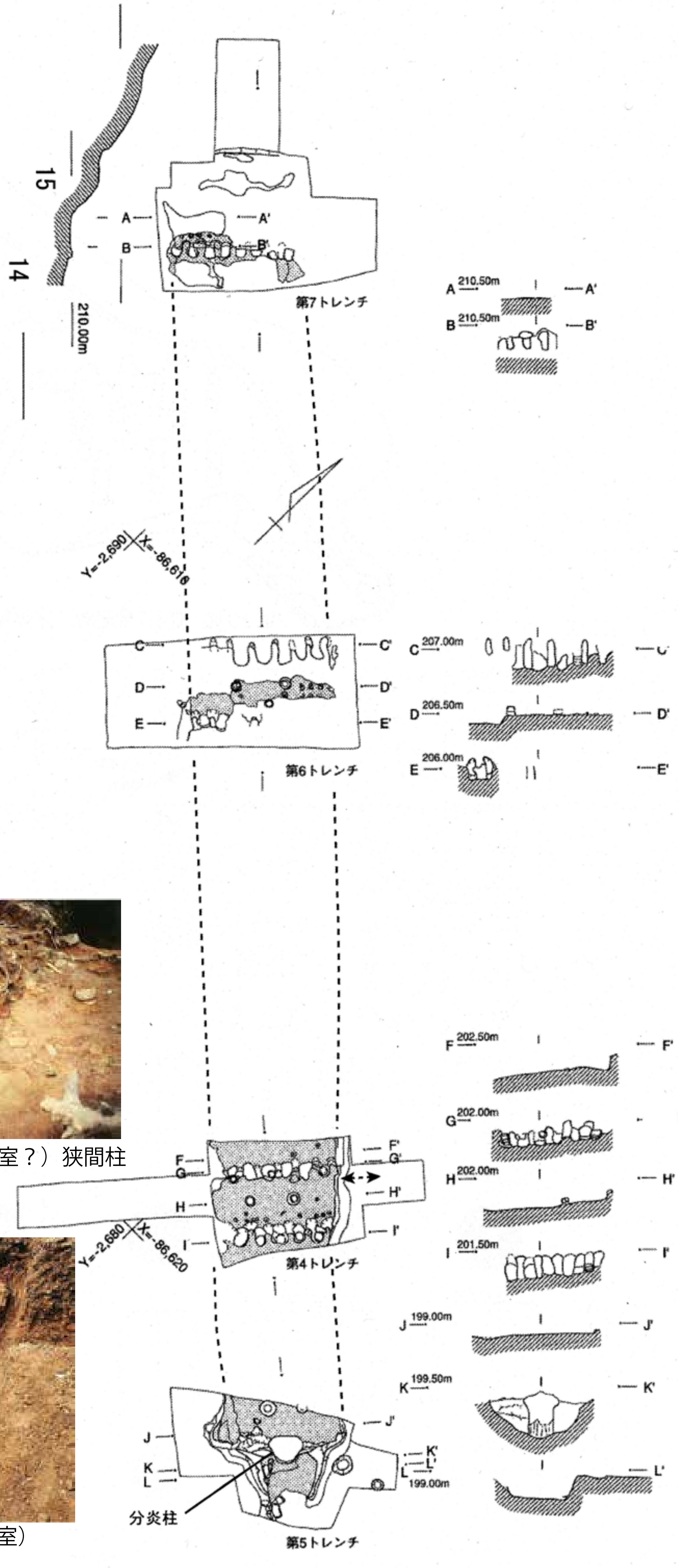
連房部分（後半部）の全景

第 7 トレンチ（14・15 室？）狭間柱

第 6 トレンチ（10 室？）
最終焼成　擂鉢出土状況

第 4 トレンチ（4・5 室？）狭間柱

第 5 トレンチ（燃焼室・1 室）
分炎柱・昇炎壁



瓶子 2 号窯　窯体図（1：100）

確認された窯体２基の南西側には瓶子陶器窯跡の工房跡と考えられる幅８ｍ前後の細長い平坦面がみられます。平坦面は、２号窯焚口から３段確認され、最も東側で２号窯焚口に最も近い平坦面１は、南側に石積を設け、西隣りの平坦面２との間に土管を埋設した排水施設を設けています。これまでの調査では、柱穴や建物礎石等の遺構は確認されていませんが、地磁気探査によって熱変化した可能性の高い部分も未調査部分で検出され、今後の調査によりその詳細が明らかになると思われます。

工房跡（平坦面１・２）の遺構検出状況（東から）左手は南側の小谷。右手は２号窯のある斜面

工房跡（平坦面１・２の境界）石積遺構・土管を用いた排水施設の検出状況（北西から）

瓶子陶器窯跡からは、江戸時代前期に生産された多様な製品が出土しています。

平成 10 年度の確認調査では、1 号窯の燃焼室内から素焼きの茶入が 10 点並べられた状態で出土しています。この地での操業最終段階で、あるいは窯場を閉じる際の供献的な儀礼に伴うものではないかと考えられています。

平成 15 年度の発掘調査では、南側下方の物原 (生産品 (不良品等) などの廃棄場所) から 3940 点もの資料が出土しています。

日常品の調理具・貯蔵具である擂鉢 (701 点 (17.8%)) や銭甕 (411 点 (10.4%)) 等が多い一方で、茶の湯に用いられた天目茶碗 (670 点 (17.0%)) やその他の碗類 (568 点 (14.4%))、特注品である茶入 (722 点 (18.3%)) も多く、大型の型打皿・花瓶の存在も注目されます。

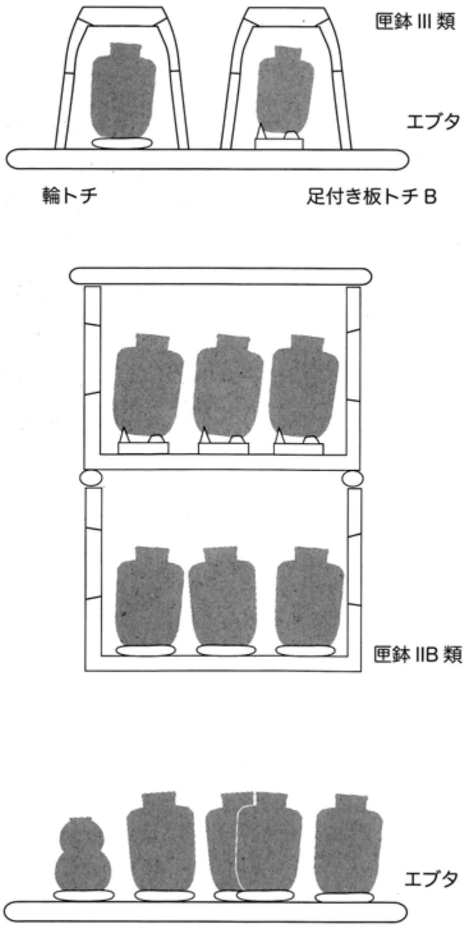
さらに、この他注目されるものとして、人名が書かれた陶片（付け札）が挙げられます。陶片が示す人物は、尾張柳生の一族である「柳生兵助(ひょうすけ)（柳生兵庫厳包(やぎゅうひょうごとしかね)）」をはじめ、「下方(しもかた)太郎兵衛」、「石川八郎兵衛」などといった尾張藩士であり、本窯で彼らが注文生産を行っていたことが明らかにされています。

【参考文献】
(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2000「市内遺跡調査報告Ⅱ　瓶子窯跡」
（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2005『瓶子窯跡』

茶陶類（天目茶碗・筒形碗・各種碗類）と特注品（木葉形皿等）

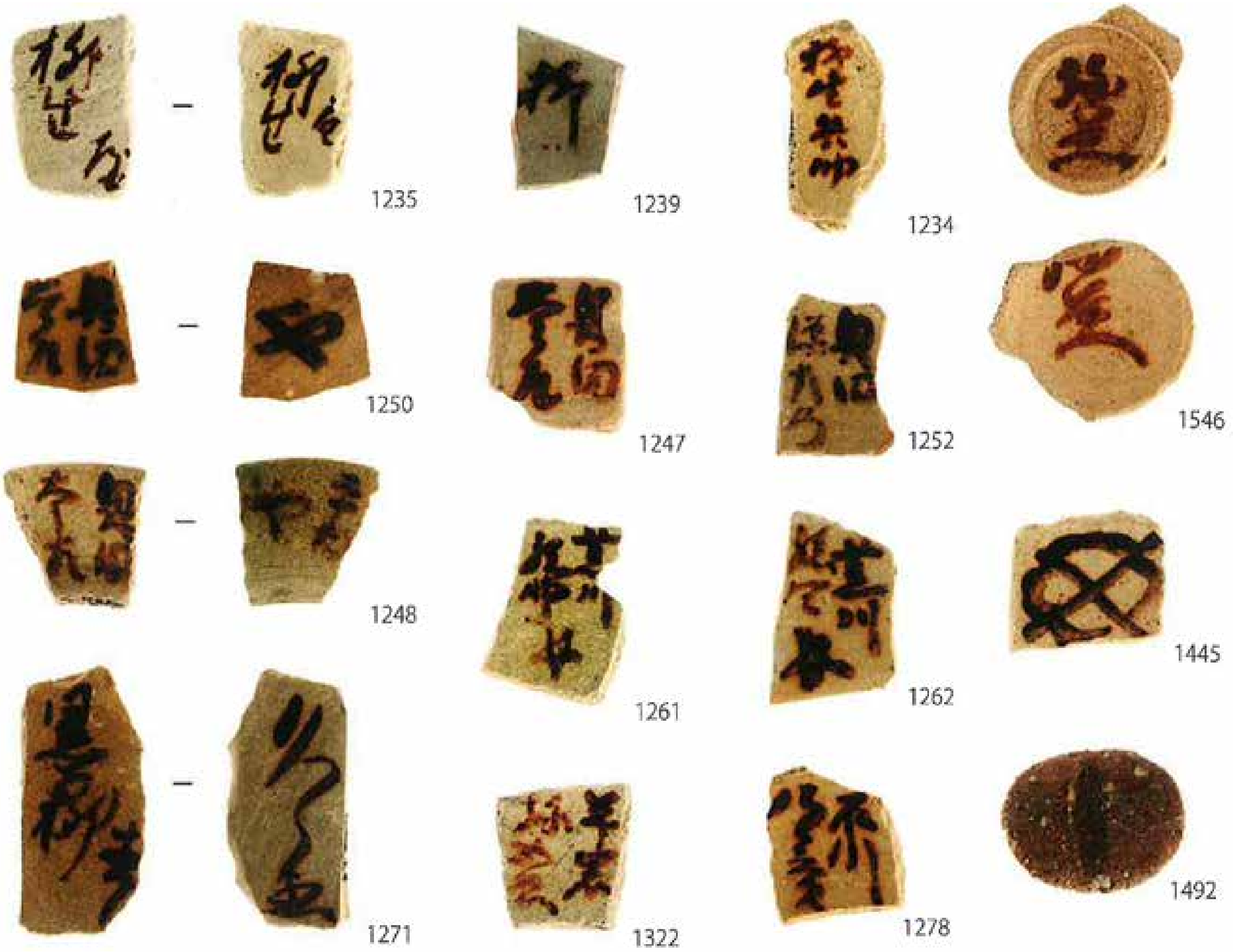
量産器種（皿・鉢・盤・壺・瓶・甕・香炉等）

※（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2005 より転載



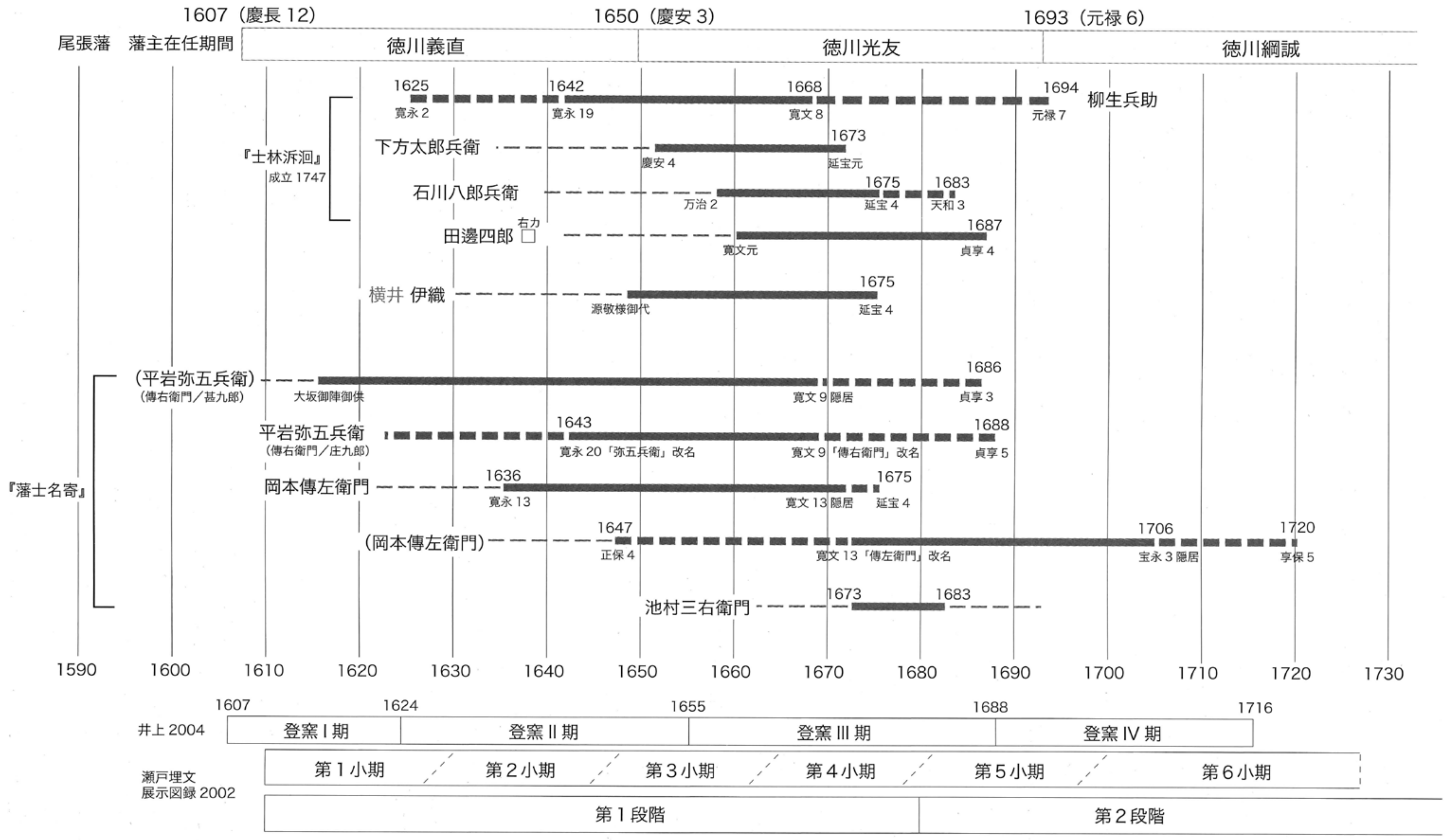
茶入窯詰の方法　想定図

物原出土の茶入



尾張藩士の名前が書かれた付札

※（財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター 2005 より転載

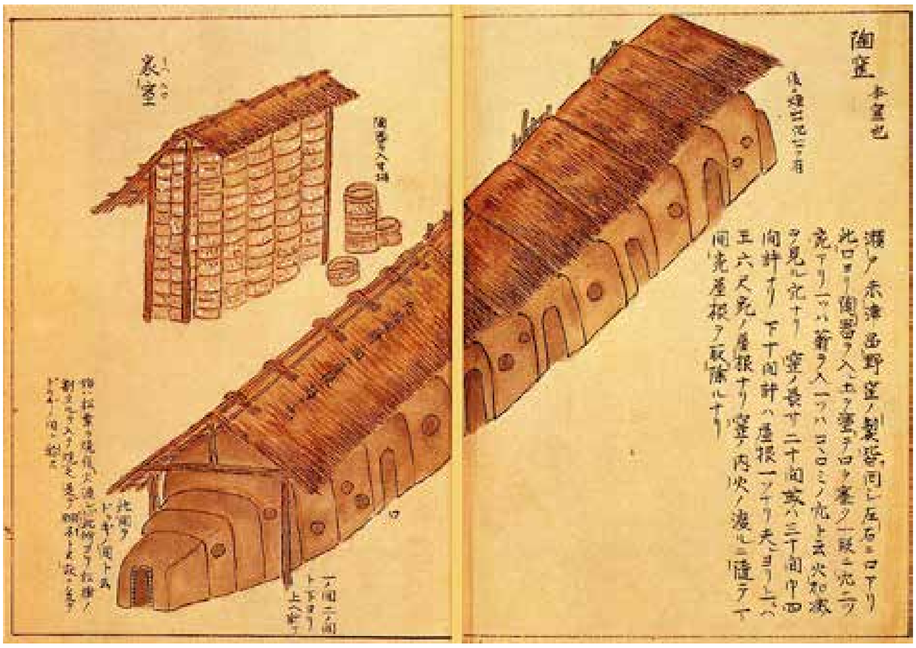


陶片人名より推定される尾張藩士

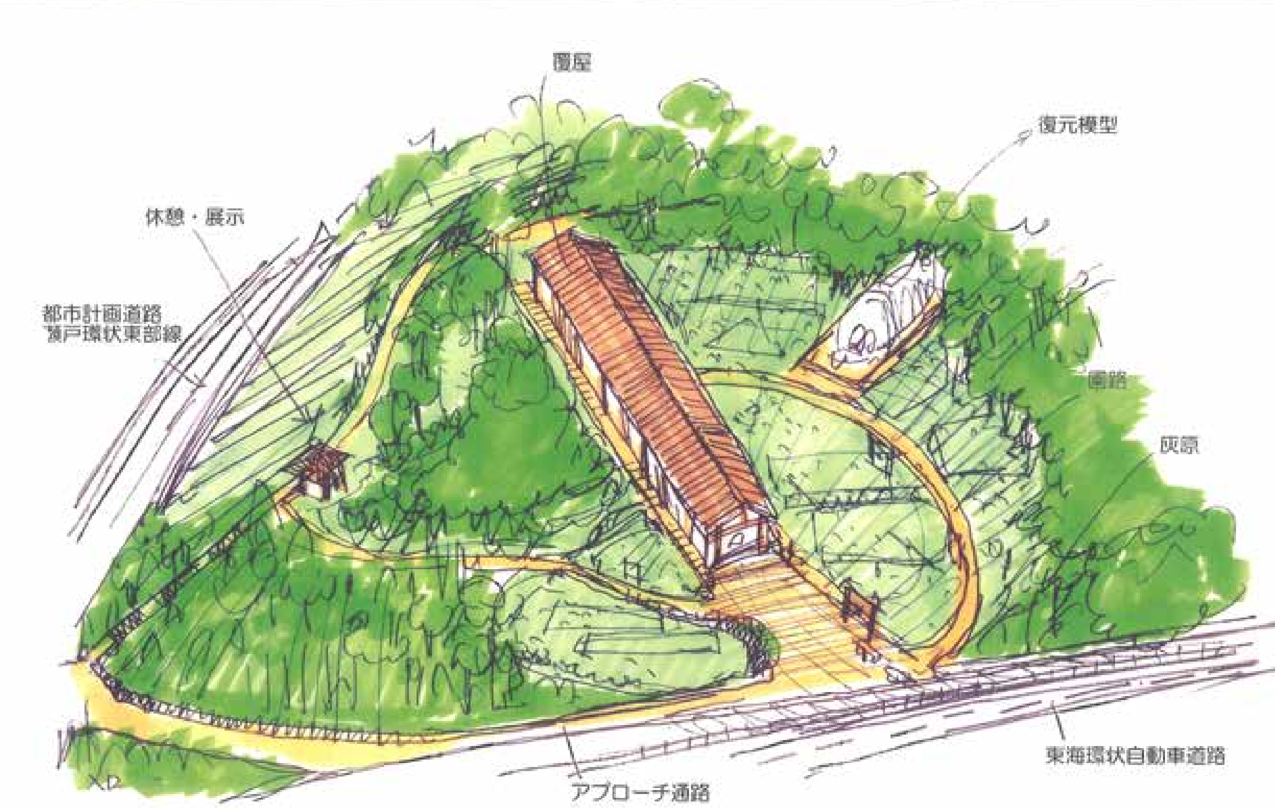
※（財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター 2005 より転載

瓶子陶器窯跡の整備へ向けて

　これまで説明してきましたように、「瓶子陶器窯跡」は、瀬戸窯跡の歴史を物語る上で、欠くことのできない貴重な遺跡であることがわかっていただけましたでしょうか。この貴重な文化財を、もっと身近に、圧倒的な存在感を体感できるようにしていくために、瀬戸市は地域の方々とともに、文化庁や愛知県の協力を得ながら今後保存と整備をどのようにしていくか検討を重ねて参ります。



『張州雑志』（1788 年完成）に記載された
瀬戸・赤津・品野の「陶窯」



瓶子陶器窯跡の保存計画イメージ図

（瀬戸市教育委員会 2002『瓶子窯跡整備基本構想報告書』より）

今後のスケジュール

＜３月＞

せと歴！　マメナシを知る

日　時：３月２６日（土）　午前９時 30 分～ 11 時 30 分

集合・解散場所：水南小学校駐車場

★定員　20 名

＜４月＞

せと歴！　春の信州飯田街道を歩く

日　時：４月 23 日（土）　午前８時 30 分～ 11 時 30 分・午後１時～４時

（日時の変更の可能性あり）

集合・解散場所：調整中

★定員各部 25 名

瀬戸市歴史文化ホームページ

平成 28 年度、新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「瀬戸市の歴史・文化～ 1000 年以上の歴史を誇るせとものまち 陶都瀬戸～」を開設しました。

これまでに開催した「まちめぐり」の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック「千年続く誇りを巡る旅」、瀬戸を知るテーマ別ガイド「のんびりじっくりせとマップ」、瀬戸の百科事典「瀬戸ペディア」などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご活用下さい。

アドレス：http://seto-guide.jp/

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団